



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	明治前期読売新聞の文体の推移：記事末形式について
Author(s)	北澤, 尚; 許, 哲
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 56: 15-38
Issue Date	2005-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/2699
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

明治前期読売新聞の文体の推移

記事末形式について*

北澤 尚 ・ 許 哲

日本語日本文学**

(2004年9月30日受理)

1. はじめに

1.1 この稿の目的

明治時代前期の小新聞として代表的な『読売新聞』は、当時の言語実態を明らかにするために不可欠な資料と言ってよい。同時代のほかの文献を圧倒するほどの膨大な言語量をほこっているし、しかも、一般大衆を対象とした談話体(俗語体)の文章である点がなにより貴重である。『読売新聞』の近代語資料としての性格については、すでに北澤・宮澤(2004)(以下、「前稿」とよぶ。)がこの文献から大量のデータを採集しつつ断定の助動詞の使用状況を考察した際に詳しく論じたので、ここではあらためて繰り返さない。ただし、明治7年11月2日の創刊号で編輯長の鈴木田正雄自身が「此新ぶん紙は女 童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書いてだす旨趣でございますから耳近い有益ことは文を談話のやうに認て御名まへ所がきををしるし投書を偏に願ひます」と述べていた、小新聞『読売新聞』の最大の特長というべきこの平易な談話体の文章について、進藤咲子(1959, 70頁)は、「それから(明治10年から、の意。引用者注。)四~五年のうちに『なり、けり』式の文語文に侵食されてゆく」という。また、小林弘忠(2002, 104~107頁)は「14年代になると、文語調がかなり多くなって来る。……15年には『いふ』、『とぞ』、『せり』、『由』が急にふえてきて『なりました』、『さうです』など口語体と半分半分になる。……16年には、ますます文語体がふえてきて、『昨日宣言せられたり』、『稀なる大狼なりと』などの文が圧倒し、同年後半には、口語の記事は数えるほどしかなくなり、ほぼ文語記事が定着する。」とより詳しく報告している。しかし、一方、山本正秀(1965, 198頁)には「社会雑報を主にしたこの欄(新聞欄の意。引用者注)の文章は、かなり後までも談話体を持続し、明治14年頃で8割~9割。17年には三分の一に減少、18年には更に四分の一に減少している。」という記述もある。つまり、これら三者三様の指摘から、『読売新聞』の文体が明治10年代後半に、旧来の文語体へと回帰していくあり様がおおよそ読み取れるのであるが、ただいづれにおいても各年毎にどのような使用状況であったのか、統計に基づく具体的な数値は示されておらず、各形式の使用率なども不明である。本稿の主たる目的の一つは、このような談話体から文語体への推移の様相を統計的に精密に跡づけてみることにある。

また、前稿の結論の一部として、明治7年11月~明治8年12月の14ヶ月間では、断定の助動詞による記事末数は記事総数に対して25.7%、動詞述語による記事末はその二倍の51.3%、残りの23%は文言止めやその他の形式であると報告したが、上記のような談話体から文語体への大きなうねりの中で、記事末の表現形式にはどのような変化がもたらされたのか明らかにしてみたいというのが、もう一つの目的である。

* A Stylistic Study of "Yomiuri-shimbun" in Early Meiji Japan / KITAZAWA Takashi, HO Chol

** 東京学芸大学(184 8501 小金井市貫井北町4 1 1)

1.2 分析の方法

以上の2つの研究の目的を遂行するために、本稿では、明治8年1月から明治17年4月までの約10年間の『読売新聞』「新聞」欄の全記事末の表現形式を調査対象とする。ただし、年ごとに全12ヶ月分を調査した場合、記事末形式の総数(換言すれば、総記事数)は約7万~8万例に達することが試算によって事前に判明し、それでは現時点での本稿の執筆者二名の作業量としては困難を極めるため、やむを得ず、各年から等間隔で1月、4月、7月、10月の計4ヶ月分を取り出し、それらを調査することにした。その結果として、調査した総記事数は23981例であり、ひとまず、分析に値する言語量と見なしたが、今後さらに機会があれば調査範囲を拡げてみたい。明治17年4月までを今回の調査範囲としたのは、先掲の山本正秀(1965)および小林弘忠(2002)の指摘を改めて検証し直すためである。

なお、各記事末の表現形式の形態論的な取り扱い方については次節に譲る。また、特に「新聞」欄に限ったのは、前稿の「分析の方法」でも述べたが、他の「官令」「寄書」の記事の性格は「新聞」とは異なるので、ひとまず、それらと区別しなかったためである。なお、調査は、前稿と同じく、読売新聞メディア企画局データベース部編集・発行『明治の読売新聞』1999年刊(CD-ROM版)によって行った。なお、記事の引用に際しては原文通りとするが、論述や図表における項目としては現代仮名遣で統一した。当時の読売新聞では「言う」「言ふ」のように不統一であることが多い。

2. 記事末形式の種類と使用状況

2.1 記事末形式の種類

「新聞」欄における各記事末の表現形式とは、言いかえれば、各記事の末文の文末部の形式を指す。それゆえ、それらを品詞と文成分の視点から、たとえば、名詞述語・動詞述語・形容詞(形容動詞を含む。以下、同様)述語に三分類することが考えられる。ただし、今回の調査結果では、形容詞述語の実際の用例数がきわめて稀であることがわかったので、本稿では、以下、主に名詞述語と動詞述語とに注目し、形容詞述語の類については、便宜上「その他」(巻末の図表1の「その他」である。)に含めることにする。また、近代日本語の文法・文章・文体を分析するときは対象とする文献資料の文末表現がいわゆる「敬体」か「常体」かの違いについても留意することが必要であるので、以上の点に留意しつつ、記事末の表現形式についての基本的な分類の枠組みを示すと、次のようになる。「する」「します」などはサ変動詞の活用形式を指すのではなく、一般に「動詞終止形」および「動詞連用形+ます」の意味で本稿では用いている。以下同様。)

	名詞述語	動詞述語
常体	だ, である, ...	する
敬体	です, であります, でございます	します

さらに、当時の小新聞の「新聞」欄を読み進めていくと、その記事末に、伝聞を表す形式が多用されていることに気づく。今、動詞述語に限ってみても、次の(1)~(5)の下線部のような、伝聞の形式を添えた表現がしばしば用いられている。(なお、文例の直後の(明8.1.20)は、その「新聞」記事が明治8年1月20日の第1面からの引用であることを示す。以下同様。)

- (1) 今月九日の宵甲州身延山の西溪本種房より火事が始り方丈も堂も残らず焼け寺内八十一坊ほども類焼したといふ(明8.1.20)
- (2) 本所花町の清水義通といふ土族が今月十六日に龜戸の天神へ参詣し頻りに拜んで居るとき其傍で京橋邊の吉田といふ男も拜んで居てフト清水の懐中時計を盗む氣になりうまく奪つて家へ持歸へつたが何分はじめての盜賊ゆゑ氣味が悪くなりどうも堪らないので其時計に詫状を添へて返しましたといふ(明10.1.20)
- (3) 高知縣の土族江間三郎八鹿兒嶋縣へお雇ひちう種子島支廳の長と成つて居るうち小權を以て大權を犯したゆゑ懲戒令に當られて免職のうへ三年のあひだ官員と成ることを禁ぜられましたと(明11.1.12)

- (4) 土耳其の公斯坦丁堡のレソントヘラルド新聞社で八同國政府で秘密にしてある書牘を新聞へ出したゆゑ
とるこ こんすたんちのうぶる しんぶんしや どうこくせいふ ひみつ てがみ しんぶん だ
 發行禁止を申し付けられ記者八直に土耳其の領内を立退けと申し渡されたと(明11.7.10)
- (5) コレラ病 検疫の事について横濱在留の外國領事より何か不服を云ひ出したとかいふ(明12.7.9)

これらの「したという」「しましたという」「しましたと」「したと」「したとかいう」などについては、前稿と同様、本稿でも、学校文法の品詞分解のような文節への切り刻み方をせずに、むしろ、各々、ひとまとまりの一形態として取り扱うことにする。つまり、「したという」を例にすれば、「した」(または、更に「し+た」)「と」「いう」のように分解できることを承知しているが、「したという」という文末形式が、同じ常体の「したと」「したとかいう」や、敬体の「しましたという」「しましたと」などといった伝聞の形式を添えた形式群と、さらには、伝聞ではない言い切りの「した」それ自体と、paradigmatic な関係にあることを明示したために、あえて分解しないという立場を本稿はとっている。

2.2 記事末形式の使用状況

ここでは、まず最初に、明治8年1月から明治17年4月までの『読売新聞』『新聞』欄の総ての記事(既述したように、正確には各年の1月・4月・7月・10月の4ヶ月分を調査範囲とする)において、どのような記事末形式がどれほど用いられているのか、全数調査した結果を示す。なお、使用されている諸形式の一覧と各形式の用例数は毎月ごとに集計し、巻末の図表3-1~3-7に示した。(ただし、「文語形」「体言終止」などの形式と数値は、巻末で図表にしていない。それらの類については後述する。)10年間の記事末形式の総用例数23981例の1%である240例以上の使用度数をもつ諸形式を、度数の高い順に、その用例数と使用率をあわせて示すと下のようになる。(使用率は、各記事末形式の用例数の、10年間38ヶ月の総記事数に対する割合を百分率で示した。百分率は少数第2位を四捨五入した。)

・第1位	しました	6589例	(27.5%)	3768 + 2821
・第2位	文語形	3264例	(13.6%)	155 + 3109
・第3位	体言終止	2529例	(10.5%)	648 + 1881
・第4位	します	1491例	(6.2%)	997 + 494
・第5位	したという	1249例	(5.2%)	488 + 761
・第6位	するという	1118例	(4.7%)	549 + 569
・第7位	であります	866例	(3.6%)	425 + 441
・第8位	でありました	670例	(2.8%)	437 + 233
・第9位	しますと	465例	(1.9%)	310 + 155
・第10位	しましたと	383例	(1.6%)	161 + 222
・第11位	だ	333例	(1.4%)	118 + 215
・第12位	しません	305例	(1.3%)	257 + 48
・第13位	しましょう	282例	(1.2%)	217 + 65
・第14位	でありましょう	248例	(1.0%)	183 + 65

すでに述べたように、本稿で対象とする『読売新聞』『新聞』欄は、市井の事件を報じた、現代の社会面の記事に該当する。それゆえ、過ぎ去った事件を事実として報じるために「しました」が約6600例も使われ、10年間全体では3割近くも占めているのは当然であるかのように思える。しかし、その一方で、巻末の図表3-2を見ると、常体の「した」が全体でたった27例しか用いられていないという事実にも注意しなければならない。上記のように「したという」が上位に位置し、しかも1千例を越えて用いられていることを考えると、「した」の少なさは意外であると言ってもよい。このような敬体と常体との対立については次節で詳述することにするが、当時から用いられ、現代語でもごくありふれた形式が、近代語のある種の資料ではごく稀にしか出現しないという場合があるのである。他にも、今回の調査で、「であります」と「でありました」がどちらも数百例ずつ用いられているのに対して、常体の「である」と「であった」による記事末はほんの数例ずつしか見いだせないという例もあった。

なお、参考のために、上記の使用度数順位表の右端に、総数を^{プラス}印を介して二分した。左側の数値が明治8年1月~明治12年10月の、いわば前半期の用例数であり、右側の数値が明治13年1月~明治17年4月の後半

期の用例数である。(ちなみに、前半期の総記事数は11362件、後半期は12619件で、ほぼ二等分されている。)つまり、第1位「しました」に関して言えば、「3768+2821」とは、前半期での使用が3768例で、後半期での使用が2821例であるという意味である。この+印の左側と右側の数値を、仮に「a+b」と記すなら、「a>b」のタイプであれば、前半期に盛んに使われていたのに対して後半期では衰退したことになる。逆に「a<b」のタイプであれば、時代が下るにつれて使用率が増加していった可能性が強い。もちろん、ここでの「a+b」の二分法は単なる目安にすぎず、通時的な推移についての本格的な考察は次節以降で行いたい。

では、以下、主要な記事末形式の用法上の特徴について見ていく。

2.2.1 「しました」

上述したように、「しました」は記事末形式の中で最も多く使用されており、全記事末形式の3割近くを占める。また、動詞述語の総数に対して、65.7%を占めている。新聞がニュース報道を主たる目的とする以上、その記事末が過去形による終止であることは自明であるように考えられるが、当時の『読売新聞』の「しました」の使用実態はやや複雑である。

もとより、「しました」によって事実を報じた記事は枚挙にいとまがない。たとえば、叙任に関しての「任ぜられました」「補せられました」「免ぜられました」「仰せ付けられました」など、有名人の動静についての「出発いたしました」「帰京いたしました」「お帰りになりました」「出張することになりました」など、役所から市井の人々を表彰する「賜はりました」「御褒美をいただきました」「下されました」など、犯罪記事の「盗まれました」「逃げ去りました」「召しとられました」など、火災記事の「焼けました」「消えました」「消しとめました」などである。

しかし、その一方で、それとは異なる種類の「しました」も観察することができる。

- (6) 来月六日七日のころに 皇后宮さま八江の島鎌倉へんへ 行啓あらせらるゝといふことが朝野新ぶん
に出で有りました(明8.4.2)
- (7) ……自分の体八或る官員の妾と成りその金を鈴木へあてがひ夫にて同人の身を助けて居るが以前より
今までも深切八盡せどもいやらしい事八少しもなく此女こそ實の正しい女で有ると原田君よりわざわざ
知らせた下されました(明8.4.8)
- (8) 今月二十六日の夜る關口水道町へわたる江戸川大橋の杭に火が燃つきたるを夜蕎麦うりが見つけて早そ
く巡查へ知らせて漸く消しましたが定めし煙艸のふき壳かまた八蠟燭の心を橋杭へおとして夫より燃出
した事有るふと或る人より知らせてまゐりました(明8.4.30)
- (9) ……先月三十日に此熊が小家を出て近所の子供を相手にいたして狂つて居たるを浅草馬道の寺島俊造
といふ人が通りかゝつて大きに驚き風呂しき包を投出して子供を抱て漸やく熊を小家の中へ追こんだゆ
ゑ人に怪我もなく直さま藝を始め出したと此小家に居る新吉より申て来ました(明8.7.3)
- (10) 浅草西仲町四番地の越中屋庄三郎といふ人八親孝行にて召仕のものを憐み實によく行届いた人ゆゑ
見世のものも自から主人の為を思ひ近所にても人が評判をして居ると足田さんより知らせてきました
(明8.10.2)
- (11) 今月一日以来の霖雨にて下野國渡瀬川が暴漲して足利より館林へ通路の船橋が壊れし旨一昨日栃木縣
より電報が有りました(明16.7.8)

上の(6)~(11)も、「しました」で記事が結ばれているが、(6)は他紙からの引用であり、また、(7)~(11)も具体的な表現はちがっても、記者による直接の取材記事ではなく読者からの投書をもとにした記事である点が共通している。これに関して、山田俊治(2002, 46頁)は「このように、他紙の報道を参照したり、探訪者の取材や読者の投稿などにもとづいて、編集人鈴木田正雄が、机上で紙面を作っていた様子を想像できることと思う」と述べている。

つまり、(6)~(11)の「しました」は、それ自体は過去時制の形式ではあるが、下線部のような広義の伝聞表現の構成要素であると言えるのであり、先の「任ぜられました」「賜はりました」「焼けました」などの、確言の「しました」とは区別される。

さて、ここで「しました」を以上の二種類に区別しつつ、各々の使用状況を比べてみると、興味深い事実が明らかになる。調査範囲である明治8年~17年の10年間のうち、前半期の代表として明治8年の4ヶ月間、後

半期の代表として明治16年の4ヶ月間の「しました」を調査してみると、明治8年では全250例のうち71例（28.4%）の「しました」が(6)~(11)のような伝聞表現であるのに対して、明治16年では全452例のうち伝聞表現は18例（4.0%）にすぎない。さらに、明治8年では(6)~(10)のように多様な伝聞表現が使用されるが、明治16年の18例のうち16例までが「電報がありました」に偏っている。以上は、ごく限られた範囲の調査結果であり断言しがたいが、いずれにしても、今後、近代語の資料による文体の調査を行う際、常体/敬体の区別ばかりでなく、各表現の伝達上の語用論的な機能などにも目を向ける必要があるだろう。

2.2.2 「します」

「します」は全体では第4位であるが、動詞述語の記事末形式としては、前述の「しました」に次いで第2位（動詞述語全体の14.9%）である。ここで「しました」の用法と関連づけながら取り上げてみたい。「しました」が最近起きた出来事を報じる形式であるとするなら、「します」は、「賜はります」「行幸あらせられます」「大演習があります」「飛行されます」「開廷されます」「催します」「仰せ付られます」「満開になります」「休暇になります」「出張されます」「帰任されます」などのように、これから実現するであろう確定的な未来の出来事を報じる形式であると言える。ただし、前述の「しました」がそうであったように、「します」も確言の用法ばかりではない。

- (12) ……何の因果でこんなに山で苦勞をさせらるゝだろうとふさいで居ますと或人に笑はれました新聞やさん野暮だね互なんでも此節八山でなければいい錢まふけに八ならないよと申た人が有ります（明8.7.2）
- (13) ……またお世話下されるなら是も序に願ひたいの八水道はしより小日向はし金剛寺の下邊までに武島町へ出る横道が一ツしか無いの八毎々人が困りきりまた有つても通りぬけ無用などと致して有つて並の人八實によわるが盗賊などへ八是がぬけ道だと教へるやうなもので有らうとお世話やきに申て来た人が有ります（明9.1.9）
- (14) 上海メルキユリーといふ新聞紙に北地よりの通報に據ればカスガル境にて魯西亞兵と支那兵と戦ひ魯西亞兵八二百人ばかりも撃殺されたと出てあります（明13.4.17）
- (15) 大審院を始め各裁判所の属官の進退八総て司法省にて取扱はれる例に倣ひ今度各省廳の會計官を総て大蔵省の附属とし同省にて進退される事になると云ひまた其筋にて各判任官の給料を総て年給に改められるとの噂が有ります（明16.1.23）

これら(12)~(15)の「します」は、2.2.1(6)~(11)の「しました」と同じく、広義の伝聞表現の構成要素である。

さらに、「します」には「しました」にはない、その他の用法も見られる。

- (16) ……そのうち大きい聲を出して其場へ倒れ近所の人に助けられて漸く息をふき返したといふが呉々も酒八程よく飲まねバとんだ間違が出来ます（明8.1.20）
- (17) ……併しは八朝野と少しが居るから御心づきの方八有の儘にしらせて下され節々きゝちがひが有つて一昨日も假名垣頑兄に心づけられましたが無に何にしても非道な男だと思ふと涙がこぼれます（明9.4.17）
- (18) ……つひに三人とも罰金を取られましたが毎日厄介者の多いので書き倦ます（明9.4.1）
- (19) ……荷雑車、海陸車などといふ何れもよい工夫の車だと聞きましたがまだ圖を見ませんから其内に委しく出します（明9.7.18）
- (20) ……正雄が出版いたして八どうだと勧められたので是八至極よい事と思ひつき其筋へ願つて官許を受ましたから何れ近々に出版し一冊八三錢にて月に三度づゝ出し讀賣新聞賣捌所へも廻しますから皆さんへ一寸御披露いたします（明9.7.20）
- (21) ……夫を知らせのまゝ書たの八記者の誤りゆゑ恐れ入つて取消ます（明9.7.31）

上の(16)(17)の記事末では、事件に関しての記者の教訓的な感想が述べられている。また(18)の「書き倦ます」には、事件への感想と記者としての執筆態度が表現されている。(19)~(21)では、掲載の予定や誤報の訂正といった言語行為そのものが、遂行動詞(performative verb)によって表現されている。

以上のように、『読売新聞』の記事末形式としての「します」には、確定的な未来、伝聞表現の構成要素、記者の評言、遂行動詞による言明解説、の類があることがわかった。

2.2.3 「であります」「でありました」などの断定の助動詞

「であります」866例は、全記事末形式の3.6%にすぎないが、名詞述語の総数3615例の24.0%を占めている。さらに、関連する活用形式として「でありました」670例と「でありましょう」248例と「ではありませんか」176例も加算すると、合計で1960例になり、全名詞述語の半数を上まわる。

ちなみに、ここで、前稿と同様に、断定の助動詞の諸活用形式を束ねて、その総称として、デアリマス体、デアル体などと呼ぶことにして、どのような断定の助動詞が記事末文体の指標として頻用されているかを、ひとまず調べてみることにした。(各列の右端の数値は、2.2と同様に算出した。)

・デアリマス体	2134例	(60.9%)	1343 + 791
・ダ体	663例	(18.9%)	316 + 347
・デアル体	440例	(12.6%)	218 + 222
・デゴザリマス体	251例	(7.2%)	248 + 3
・デス体	15例	(0.4%)	6 + 9

本稿の巻末の図表3-3~3-7を参照しつつ順位づけると上のようになるが、各々の断定の助動詞の使用状況を詳しく見ていくと、ごく限られたいくつかの活用形式が記事末形式として集中的に使用されていることに気づく。たとえば、デアリマス体の91.8%は「であります」(40.6%)・「でありました」(31.4%)・「でありましょう」(11.6%)・「ではありませんか」(8.2%)の4形式で占められているし、ダ体の81.6%は「だ」(50.2%)と「だという」(31.4%)の2形式である。また、デアル体においては、「である」という終止形言い切りの形式は、

- (22) ……第七よごれた襦袢や吐たり下した不浄もの八直に家の外へ出して捨てずに置くの八醫師が見せるといつた時の爲で有るから是らも心得て置かねば成らない事で有る(是から先八食物の製法方に成りますが今日八是まで)(明11.4.4)

の1例だけで、デアル体の76.8%は「であるという」(47.3%)・「であろうという」(15.5%)・「であったという」(14.1%)であり、伝聞の「～という」が非常に目立っている。反対に、デゴザリマス体では終止形言い切りの「でござります」が82.5%を占めているが、このデゴザリマス体については、用例の大半が明治8年~明治11年に集中しており、明治12年~明治17年では記事末形式として使われなくなっていく点が特徴的である。また、デゴザリマスは今回の調査範囲では皆無である。

一般に、近代語の文体の研究では、文末辞の種類によって、ダ体、デアル体、デアリマス体、デス・マス体などと呼ぶ習慣があるが、重要なことは、それらの研究において、各文末辞がどのような活用形式として具体的に現象しているかが常に検証可能なデータとして明示されているかどうか、であろう。

なお、記事末形式としての「であります」には三種類の用法がある。第一は、「～とは結構な事であります」「困ったものであります」「感心な人であります」「気の毒な事であります」「憎い奴であります」などの、出来事に対する記者の感想であり、この類は枚挙にいとまがない。第二は、「～という評判であります」「～と申すことであります」「～といふ話であります」などの、伝聞表現の構成要素となる類である。第三は、以上の二種とは異なり「～は七厘五毛であります」「～が初日であります」「～の諸氏であります」などの、中立的な叙述文の述語となる類である。次の(23)~(25)は各類の文例である。

- (23) 大坂府下曾根崎村の人力車曳の悴で七ツになる富太郎と外に二人の子供が今月十八日に同所梅田の鏡道線の上へ小石をならべて居たのを巡廻の人に見付られて戸長へ引わたされましたが子供が鏡道のそばへゆく八實に危ないことで有ります(明10.10.25)
- (24) ……貸座敷仲間に八二三軒もありましたさうだが決して施行に出したわけで八なく誠の志ざしばかりだとて丁寧に送つたのだといふはなしであります(明9.1.7)
- (25) 来月三日濱町一丁目の高橋由一先生の宅で催す油繪展観會八網船の圖、美人の圖、函嶺曉霧の圖其ほか數十幅であります(明12.7.31)

2.2.4 体言終止

これまで2.2.1~2.2.3で分析してきた記事末形式に比べると、ここでの「体言終止」という類型は異質であるように思われる。なぜなら、これまでの類型は、形態による分類であり、だれにでも追試可能であったが、ここでの「体言終止」(いわゆる「体言止め」とは異なる。)とは、以下の(26)~(31)の文例におけるような、いくつかのタイプの記事末形式を括ったものであり、定義や下位分類に関する検討を要するからである。

- (26) 一昨日發各府縣より其筋へのコレラ電報八和歌山縣類似患者男二人女一人内一人全癒、大坂府先月廿九日新患者二人あり、滋賀縣昨三十日類似患者女壹人あり岡山縣類似患者三人内一名死亡(明13.7.3)
- (27) 芝居と相撲 市村座と中島座八昨日番付を配り市村座八今日より中島座八昨日より開業との事また回向院の相撲八昨日太鼓が廻り今日より興行(明17.1.4)
- (28) ……親の歎きも顧みず平気で居る八我子ながら仇敵と民次郎が踏んづ打いつ折檻したうへ其筋へ召連れ訴へ出たれば二局へ送られてお調へのすゑ昨日東京輕罪裁判所にて重禁錮二年六ヶ月と監視一年六ヶ月に處せられたと八俳優などに現を扱すお轉婆娘のよい誠しめ(明16.1.21)
- (29) ……一昨日神奈川まで来た頃は最早一銭もなくなり痛み疲れた足を引摺りながら難澁して居るを鉄道局お雇ひのワード氏が見認めて憫然に思はれ連の積りにして瀝車へ乗せ東京まで連れ歸った上に新橋停車場より人力車に乗せ若干の金まで與へて本人の宅へ送り届けたと八篤志の人(明16.4.18)
- (30) また玉乃司法大輔に八近日大審院長に任ぜられて渡邊檢事兼議官が司法大輔に任ぜられ岸良大審院長八檢事に任ぜられるとの風聞(明13.4.18)
- (31) ……先刻八或る館の耶穌の宣教師が通りかゝつたのを引いたので教師八大いに怒り脊にて瘦腹を蹴倒したので有りますと語つたといふが一昨日八同所にて二人ばかり密賣淫が捕へられたとのこと(明17.1.16)

まず、(26)/(27)の類は、いわゆる「漢語サ変動詞の語幹用法」であり、他にも「明日開廷」(明17.1.20)、「三戸焼失」(明17.1.26)、「其場へ倒れたまゝ頓死」(明13.4.24)、「一同退散」(明16.4.1)、「二人とも拘引」(明13.4.17)、「~へ送致」(明13.10.22)など多くの例を見いだすことができる。それに対して(28)/(29)の類は普通の名詞であり断定の助動詞が省略されている。他にも「~とは責めてもの罪滅し」(明13.4.8)、「~とは言語道断の不孝者」(明13.4.16)、「~の茂手木悦之助」(明13.7.20)、「~とは近ごろ珍しい大南瓜」(明13.10.2)、「~は207人」(明16.7.7)、「不幸中の幸い」(明17.4.8)、「~とは見掛に寄らない横着女」(明13.4.14)など、多様な文例が見いだせる。さらに(30)/(31)は、(28)/(29)と同じように断定の助動詞の省略であるが、伝聞による報道であることを末尾で「~との風聞」「~との事」などのように明示する類として特に立てた。これらは「~より帰ってきた人の話し」(明13.10.3)、「近々瓦解であらうとの評判」(明13.7.8)、「~と同地よりの通信」(明17.1.16)、「~を施行する由」(明17.1.23)といった、「こと」「由」「件」「話」「噂」「風聞」「評判」「知らせ」「通信」などの名詞によって終止している。

ただし、本稿では、この「体言終止」について上記の三分類を試みつつも、いまだ定量的な分析にはいたっていない。なぜなら、上の(26)~(31)の文例は各類の典型的な文例ばかりであって、実際には典型から逸脱した文例も少なくないからである。

- (32) ……とうへ三百圓ほど取られてホウの体で逃げ歸つたが此夫婦八大野政之助(四十二年)女房おしま(三十三年)とて所で名代の悪者であるといふから身元も知らぬ婦人と八決して心安くせぬこと(明13.4.28)
- (33) ……蛇八今日が始めてだ定めて七十五日生延びるだらうと舌鼓を打って居るうち顔の色が變り俄かに苦しみ出して死にましたが異味を嗜む者八必ず此様な目に逢ひますから性の知れぬ物八喰ぬこと(明13.7.9)
- (34) ……嵐の中を厭はず驅廻つて危ない家の人を残らず我家へ入れ女房八また泣叫ぶ長屋の子供達を介抱してやりながら炊出しをして翌朝十一軒の者へ残らず振舞つた八誠に感心(明13.10.8)
- (35) ……火消し道具に唧筒といふ便利の器械があれば火付けの方にも摺附木に石炭油といふ道具が有るから御用心(明13.1.25)
- (36) ……一昨々日午前八時ごろ例の吉原の戻りに日本橋まで来ると思ひがけなき舊備主鈴木久兵衛に八

と出遇ひ逃げるにも違なく忽ち同人に取押へられて坂本町警察署へ引渡されたと八宜い氣味(明17.1.15)

- (37) ……三輪何某八最初の廣言に引替へ痛さを堪へ勝負八時の運た工、曲も無いと咳きながらコソ〜
樂屋へ引き込んだと八笑止千萬(明13.4.1)

たとえば、上の(32)(33)は、現代語の「明日は早起きすること。」のような、文末を形式名詞「こと」で終止させる行動要求のモダリティの意味で解釈することもできる。(34)では、省略された表現が「だ」などの断定の助動詞なのか、「する」「した」などのサ変動詞なのか定かではない。また、(35)(36)(37)の文末には文としての完結性が感じられ、省略形ではなく、それ自体を独立的な用法と見なすこともできる。今後、かりに「体言終止」をすべて下類化できたとしても、厳密に言えば、それは典型から周縁への連続相として描き出せると言っているにすぎず、個々の文例の位置づけには分析者の主観が混入してしまうおそれがある。本稿において、「体言終止」が数量的に大きなグループを成しているにもかかわらず、巻末の図表1で便宜上「その他」に含めているのは、以上の理由による。なお、巻末の図表1の「その他」には、体言終止の他に、次の(38)(39)のような、形容詞終止形および形容動詞連体形による記事末形式と、(40)(41)のような言いさしの文が含まれる。形容詞終止形および形容動詞連体形による記事末形式の総数は324例(全体の1.4%)、言いさしによる記事末形式の総数は586例(2.4%)である。

- (38) ……どうぞ御吟味を願ひますとその筋へ訴たへたといふが即席料理の兼帯宿屋また八水屋や牛肉店などに八こんな主人がよく有から(世話人とぐるで)づん〜申し立てやるが宜しい(明10.7.26)
- (39) ……銀太郎八競市にて兎を四圍に賣拂ひニコ〜もので上野の廣小路へ来るとバツタリ母親に行逢ひ逃げ様とするのを取押へて其筋へ母親から懲役にして下さいと泣きながら訴へ出たといふがサテ〜親不孝な(明12.10.24)
- (40) 一昨日は飯倉片町にて檜屋敷の兵隊と巡査と例の争そひが始まり(極ツて始まり八兵隊さんの小便のこと)何だか大騒ぎをしたといふが毎度ながら(明11.10.18)
- (41) ……清次郎八病院へ送られ逃げた卵之助も間も無く捕りましたが一時の怒に人をも傷め自分も處刑に逢と八サテ〜(明12.4.27 ~)

3. 記事末形式の10年間の推移

3.1 これまで、明治8年1月から明治17年4月までの『読売新聞』『新聞』欄の記事末形式について、その使用状況と用法上の特徴を観察してきた。諸々の記事末形式の中には、全期間一定して用いられている形式もあるが、10年間に急増や激減という著しい変化がみとめられる形式もある。この点に関しては、2.2で使用度数の順位を示す際、諸形式の各総数を「前半期(明治8年~明治12年)+後半期(明治13年~明治17年)」に二分し、その双方の数値を比べることによって、増加と減少のおおよその傾向性を見ようとしたが、本節では、さらに詳しく、年毎に使用度数上位の記事末形式を算出し、それらの10年間の推移を、まずとらえてみたい。(表1の各年の下の数値は、その一年間の総記事末形式数即ち総記事事件数である。各形式の下に示した数値は、1年間の用例数と、1年間の総記事末形式数に対する比率即ち使用率である。)

表1から、著しい量的な変化として、次の3点が見て取れる。「しました」は、明治8年~14年の間、第1位であったが、明治13年の40.5%をピークとして使用率が下降の一途をたどっている。「します」は、最初の数年間は約10%の使用率であったが、明治16年には2.5%、明治17年には1.5%(表1には示されていない)にまで落ちこんでいる。文語形は、前半期には表1にもランキングされないほど使用量が少なかったが、明治14年から急増し、明治17年には全体の半数以上に達している。

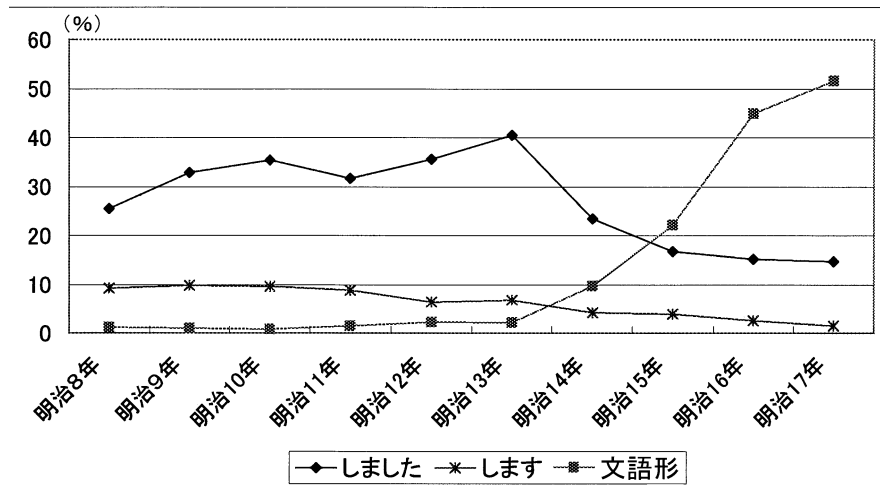
なお、上の特徴については、「1.はじめに」でも引用したように、山本正秀(1965)に「社会雑報を主にしたこの欄(新聞欄を指す。引用者注)の文章は、かなり後までも談話体を持続し、明治14年頃で8割~9割。17年には三分の一に減少、18年には更に四分の一に減少している。文末の結びの語には、『ました』『で有ります』『でございます』『だ』『たといふ』『……したさうです』等を用いている。」(198頁)という記述がある。談話体の使用率の推移については、ほぼ首肯できるが、「でございます」と「……したさうです」は、前稿において本稿の調査においても稀であり、代表的な形式である「ました」「であります」などと並記されるべ

表 1

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	1～6位の合計(%)
明治8年	しました	します	であります	したという	でございます	しません	550 (56.2)
979	250(25.5)	91(9.3)	67(6.8)	49(5.0)	47(4.8)	4(4.7)	
明治9年	しました	します	言いさし	でございます	体言終止	であります	1343 (60.4)
2225	73(32.9)	22(9.9)	11(5.2)	10(4.6)	9(4.4)	7(3.5)	
明治10年	しました	します	でありました	するという	したという	しますと	1739 (63.3)
2746	97(35.4)	26(9.7)	13(5.0)	12(4.7)	12(4.7)	10(3.9)	
明治11年	しました	体言終止	します	するという	しますと	でありました	1836 (62.3)
2949	93(31.7)	26(9.1)	26(8.9)	14(4.7)	12(4.4)	10(3.4)	
明治12年	しました	するという	したという	します	体言終止	であります	1680 (68.2)
2463	87(35.6)	18(7.5)	17(6.9)	15(6.4)	14(6.0)	13(5.6)	
明治13年	しました	体言終止	します	したという	であります	するという	1762 (71.1)
2477	100(40.5)	20(8.1)	16(6.8)	13(5.5)	13(5.2)	12(5.0)	
明治14年	しました	体言終止	文語形	したという	するという	します	1947 (66.1)
2946	68(23.4)	51(17.4)	28(9.8)	18(6.3)	14(5.0)	12(4.2)	
明治15年	文語形	体言終止	しました	したという	するという	であります	1915 (75.5)
2536	56(22.1)	53(22.1)	42(16.8)	16(6.5)	11(4.7)	10(4.2)	
明治16年	文語形	しました	体言終止	したという	するという	します	2559 (86.2)
2969	133(44.9)	45(15.2)	40(13.7)	17(5.8)	12(4.1)	7(2.5)	
明治17年	文語形	しました	体言終止	したという	するという	であります	1539 (91.0)
1691	87(51.6)	24(14.7)	22(13.3)	10(6.0)	5(3.5)	3(1.9)	

きではない。

上の ~ の特徴について、よりわかりやすく示したのが下の折れ線グラフである。ちなみに、文語形は、明治14年以前では、明治8年(1.2%)、明治9年(1.0%)、明治10年(0.8%)、明治11年(1.5%)、明治12年(2.2%)、明治13年(2.1%)である。



この折れ線グラフと、さらに、巻末の図表1によって、明治13年まで主流であった談話体(口語体)が文語形に漸次「侵蝕」(山本正秀1965の用語、進藤咲子1959では「侵食」)されるあり様がよく分かるが、そのように増加し続けた文語形とは具体的にどのような表現であったのか、本稿では最も文語形の使用率が高い明治17年4月を例として概観しておく。明治17年4月では1ヶ月全体の53.1%に当たる485例が文語形である。使用度数順に第1位から第10位までの形式を示すと、次のようになる。

- ・第1位 動詞+(ら)れたり 84 (17.3%)
- ・第2位 名詞+なり+といふ 32 (6.6%)

・第3位	動詞+たり	31	(6.4%)
・第4位	動詞+(ら)るる+よし	29	(6.0%)
・第5位	動詞終止形	21	(4.3%)
・第6位	動詞+し+といふ	19	(3.9%)
・第7位	名詞+なり+とぞ	17	(3.5%)
・第8位	動詞+(ら)れし+とぞ	15	(3.1%)
・第9位	動詞+し+とぞ	14	(2.9%)
・第10位	動詞+(ら)る	13	(2.7%)

これらは、文語形についての10年間の全数調査ではないので断言しがたいが、動詞述語では「～たり」よりも「～(ら)れたり」が多用され、全体では「～といふ」「～とぞ」「～よし」などの伝聞表現が頻用されているように見うけられる。

3.2 以上、文語形が明治14年から増加の一途をたどり、明治17年には全記事末の半数以上が文語化する事実を明らかにしたが、では、文語形によって「侵蝕」されてしまったものは一体何なのだろうか。全般的に見て「口語の記事が減った」と言うのは容易であるが、そのような説明ではたして充分であろうか。23頁の表1から読み取れる著しい量的変化と言え、まさに先述した～なのであるが、考えてみると、10年間にさほどの増減がない形式もある。たとえば、「したという」は2.1%(明治9年)～6.9%(明治12年)の幅で、また、「するという」も2.8%(明治9年)～7.5%(明治12年)の幅の中で使用率が上下しているだけである。つまり、10年間の量的な変化のし方の違いによって、記事末形式は、文語形のように増加し続けた形式、「しました」「します」のように減少し続けた形式、そして「したという」「するという」のようにさほどの変化が見られない形式、に三分類することができる。とすれば、文語形が進出した分だけ「しました」や「します」といった口語の敬体の形式が後退したという見方も成り立つ。巻末の図表1のすがたは、その考え方を証しているように見えるが、たとえば「焼けました」と「焼失せり」のように、近似した記事内容同士で口語敬体と文語という対応関係が前半期と後半期に見られるのかどうか、などの定質的な分析をも今後深めてみたい。

4. おわりに

以上、明治8年1月から明治17年4月までの各1月・4月・7月・10月の4ヶ月分についての『読売新聞』『新聞』欄の記事末形式について全数調査を行い、その使用状況を観察した結果、従来不明であった様々な点が明らかになった。その中でも特に顕著であると考えられる特徴や傾向性について次に示す。

この10年間の記事末形式の総数は23981例である。使用度数の高い順に第10位まで示すと、「しました」6589例(27.5%)、文語形3264例(13.6%)、体言終止2529例(10.5%)、「します」1491例(6.2%)、「したといふ」1249例(5.2%)、「するという」1118例(4.9%)、「であります」866例(3.6%)、「でありました」670例(2.8%)、「しますと」465例(1.9%)、「しましたと」383例(1.6%)である。(ちなみに、「です」による記事末は8例、「である」による記事末は1例だけである。)

主要な記事末形式は、文章のなかでいくつかの意味用法で使われていることが明らかになった。たとえば、「しました」は最近起きた事件・出来事の報道、のほかに、広義の伝聞表現の構成要素、にもなる。また、同様に「します」も確定的な未来、広義の伝聞表現の構成要素、記者の教訓的な感想、遂行動詞による言明の解説、の4用法に分類することができる。さらに「であります」にも、上の用法が認められる。

明治10年代半ばに『読売新聞』の文章が小新聞特有の平易な談話体(口語体)から旧来の文語体へと回帰していったことは、既に先行研究による指摘があるが、今回の全数調査によって、明治17年4月において、約半数の記事末形式が文語形であることが明らかになった。

巻末の図表を見ると、名詞述語(特に断定の助動詞)としての記事末形式は99項目あるが、そのうち、総記事数23981の0.1%に当たる24例以上は13項目しかない。同様に、動詞述語は179項目あるが、24例以上は24項目しかない。つまり、残りの大半の項目は数ヶ月に1例出現するといった程度にすぎないと言える。

なお、今回の分析は、明治17年4月までで終わっているのですが、記事末形式がいつ頃ほぼ完璧に文語化し尽くされるのか、見定められるには至っていない。また、明治10年代後半に近づくにつれて使用されずに衰退していく記事末形式にはさらに共通の特徴が見いだせるかなど、残された問題もいくつかあるが、それらに関しては後考を俟ちたい。

参考文献

- 北澤 尚・宮澤太聡(2004)「明治初期読売新聞の国語学的研究 断定の助動詞について」
『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学 第55集』
- 小林弘忠(2002)『ニュース記事に見る日本語の近代』日本エディタースクール出版部
- 進藤咲子(1959)「明治初期の小新聞にあらわれた談話体の文章」『国立国語研究所論集1 ことばの研究』
(『明治時代語の研究 語彙と文章』明治書院 1971所収)
- 鈴木英夫(1967)「新聞の文章の近代化 明治12~20年の朝日新聞を中心として」『国語と国文学』第44巻第4号
(1982)「新聞の文体」『講座日本語学 8 文体史』明治書院
- 飛田良文編(2004)『国語論究 第11集 言文一致運動』明治書院
- 山田俊治(2002)『大衆新聞がつくる明治の 日本』NHK ブックス
- 山本正秀(1959)「小新聞談話体文章の実態」『茨城大学文理学部紀要(人文科学)』第10号
(1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店

附記 本稿は、北澤が企画立案し、北澤・許両者による用例採集と分析を経て、1.~4.を北澤が執筆し、図表1~3-7を許が作成したものである。

図表2

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
記事数(=記事末数)	190	157	276	356	365	512	626	722	676	702	664	704	695	734	772	748	574	646	627	616

図表3-1 動詞述語(敬体)

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
します	10	11	28	42	40	38	68	74	63	69	67	67	70	74	65	53	45	42	26	45
しますと				2	1	3	6	12	9	38	27	32	33	27	37	34	22	6	11	10
しますとは							1													
しますか		1				1	1	2		2	3	1			2	1	1		1	2
しますのか																1				
しますのさ							1	1												1
しますかさ						1	1							1						
しますぞ		2	2	1	1				1			2	1	1					1	
しますて																				
しますものか							1													
しますよ			2	1	5	2		2	2	1	4	1					1	1	1	
しますであろう						2	1				1									
しますだろう					1			4	5	7	6		2	5	1	1				
しますそうだ							1													
しますつもり															1					
しますな		1												1	1					
しますねえ				1	1					1										
しまししょう	3	4	10	10	8	17	16	20	9	9	12	23	12	13	16	12	8	3	6	6
しまししょうか			1	1				2		2	1	1	3	1		1				2
しまししょうよ																				
しまししょうに							1								1		1			
しまししょうから										1	1									
しました	48	35	64	103	101	183	223	224	216	245	233	279	218	231	246	240	182	218	251	228
しましたと				4	1	4	3	4	10	13	8	18	21	6	12	12	6	14	13	12
しましたとき					1			2	1											
しましたという	9	1	1	1		2			1											
しましたか				1			1			1										
しましたぞ						1														
しましたな											1									
しましたね															1					
しましたよ					1															
しましたのか											1									
しましたろう		1		1	2	3	2		1		1	2	1	3	2	1	1	1		
しません	6	8	22	10	17	12	17	17	19	13	15	16	10	20	15	13	5	3	11	8
しませんと											1	1	2	1	1	2				
しませんか												2		1				1		
しませんかさ									1		1		2							1
しませんぞ				1	2									1				1		
しませぬぞ		1																		
しませんでした									1											
しませんのさ																1				
しませんよ					1		1		1				1	1				1		
しそつでもありません							1													
するかもしれませぬ						1														
せねばいけません					1															
せねばなりません	3	1	1	1		1			1								1		2	2
せねばなりませんよ			1																	
しますまい		3	5	3	3	9	5	8	3	3	3	4	4	4	4	3	1			
しますまいか				2		1		1	1			1								
しますまいさ																		1		
しますまいぞ						1														
しますまいに									1		1									

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
572	619	638	648	741	821	705	679	584	663	620	669	595	716	743	915	778	913	23981

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
46	38	42	42	38	36	29	22	31	25	25	21	24	15	9	25	15	11	1491
25	27	8	12	17	9	7	6	12	5	8	3	7	3	1	2	1	2	465
																		1
1					1													20
																		1
																		2
		1																4
				1			1			1				1				16
			1															1
																		1
1																		24
																		4
				1														33
																		1
																		1
																		3
																		3
1	2	2	3	4	14	4	3	2	4	3	3	6	2	4	5	2	1	282
																		15
	1																	1
																		3
																		2
221	249	308	226	222	184	148	135	102	121	86	118	84	96	124	148	114	135	6589
20	25	5	29	21	27	22	15	12	12	7	7	5	7	2	1	3	2	383
																		4
																		15
																		3
																		1
																		1
																		1
																		1
1	1				1						1				1			27
3	5	2	4	5	4	2	3	5	1	3	5	2	2	2				305
	1		2				1											12
																		4
																		5
						1	1	1										8
																		1
																		1
																		1
1				1														8
																		1
																		1
1		1	1			1					1							18
																		1
2	2	2		1						1		2		1				76
																		6
																		1
																		1
																		2

東京学芸大学紀要 第2部門 第56集(2005)

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
してください			2								1									
してくださいよ					1															
してください			3																	
くださいまし						1										1				
くださいまし																	1			
くださりまし							1													
ごらん							1													
してごらん									1											
してごらんなさい						1														
してはいけません	1																			
してはなりません	1	2				1														
してはなりませんぞ							1													
しなくてはなりません																				
しなければなりません					1															
しなさい		1	8	3	4	9		14	5	6	3	7	3	6	8	4	3	2	1	
しなさいよ				2		1	1		1			1								
しなさるか																				
しなされ			3	5		3														
しなさそ										1										
しなさいまし	1	4	6		3			1	1		1		2	1	1		1		1	
しなさいましよ									1											
しなされまし		1		2	2	1						1								
しなさいますな																			1	
しなさりまし								2												
合計	82	77	160	196	198	299	355	389	355	412	391	459	386	398	414	379	279	295	324	319

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
																		3
																		1
																		3
																		2
																		1
																		1
																		1
																		1
																		1
																		1
																		4
																		1
																1		1
1																		2
2		3	1	1		2	1			2								99
																		6
					1													1
																		11
																		1
			1			1												25
																		1
																		7
																		1
																		2
325	352	374	322	312	277	217	188	165	168	136	159	130	125	144	182	135	152	10030

図表3-2 動詞述語(常体)

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
する			1		1	3	1	1	2	4	2			3	4	1	2	2	1	2
すると						1	1	1	1	2	1	1	2	4	10	15	4	4	2	3
するとか													1		1	2	1		1	1
するとは						1	4		3		2	2	2		2		1	1	1	3
するとさ				1		1										2				
するとぞ																				
するという	19	4	9	2	1	2	23	36	41	27	25	35	45	29	35	31	49	51	39	46
するとかいう									2	1	2	1	5	3	8	10	21	8	2	4
するか								4			1								2	
するの							1					1	1	1	2		1			
するのさ							1	1										1		
するかさ							1	1												
するぞ			1																	
するて																1	1			
するべえ							1													
するもの																				
するものか				1		1				1										
するの							1													
するのさ							1	1												
するよ							1							1						
するである													1			1				
するだろう									1	1	1		1		2	2		1	1	
するの																				
するのさ																				
するだろう								1												
するかもしれない																				
するがよい																				
するつもり															1	1				
するな																		1		
するはずはない																				
するべし													1							
するらしい																	1			
した						1	1	1		2		1	2	1	9					1
したと							3	1	2	5	3	1	4	4	13	30	6	6	4	5
したとか													1		2	1				
したとさ				2						2		1				1				
したとは																1		1		
したという	26	9	9	5	3	6	11	26	40	29	36	23	30	26	17	21	35	55	48	33
したとかいう							1		1			4	5	4	6	4	1	1	2	2
したか						1				3	1		1	1			1			
したのか								5	1	2	1		1		1					
したかしらん					1		1	1												
したのかしらん						1														
したの															1					
したものが										1										
したものだ										1										
したやら																				
したわい																				
したのだという																				
したのだそうだ																				
したまえ																				
したろう															1					
したろうに															1					
したである																				
しよう															1					
しよう															1	1				
しようという							1									2	2	2	2	
しようか						1					1					2				
したい											1				1					
したいもの																1				
したいものか																				

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
1	5	5	3	6	6	4	5	5	5	3	6	3	7	2	2	4	1	103
5	4	1	2	5	7	1	1	1	2		1	1						83
4	2	2	4	4	1	2	3	5	10	3	3					1	2	53
				3	3	2	1	2	2		1			1				37
																		4
													1			1	1	3
30	24	44	25	41	39	38	28	21	29	35	35	35	23	25	38	26	33	1118
2	1	1		2	1									1			1	76
						2	2		1		1	1		1				15
																		7
					1													1
			1															4
																		1
			1															3
																		1
						1												1
1	2							1										7
																		1
		1		1														2
																		2
							2	3										2
				1				1										15
																		2
			1															1
							1											1
																		2
																		1
							2											2
						1												2
				2	1	1	3						1					27
8	5	2	8	5	20	5	4	1		1		1					1	148
	1	1	1		1	2	1	2	1	1		1						16
																		6
2		3			2	1	3	2	3	1	2	1					1	23
31	34	33	39	44	65	32	45	28	42	55	41	49	39	42	41	46	55	1249
																		31
1	1							2	1		1							14
			1		1	1			1								1	16
					1	1		1	1									7
																		1
																		1
																		1
		1									1							2
							1					1						1
					1													1
			2											2		3		7
				1		1												3
											2							1
																		2
																		1
																		2
					1							1						11
																		4
1								1		1								5
																		1
	1			1											1			3

東京学芸大学紀要 第2部門 第56集(2005)

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
していると															1					
してしまったと															2			1		
してしまったそうだ																				
してもらいたい											1					1	1			
してはたまらない																				
しない						1		3							1		4		1	1
しないと													1		1		1	2		
しないと											1									
しないと								1	1			2	1		1			3	1	
しないと																	1			
しないかさ																				
しないで											1						1			
しないのか												1								
しないのさ																1				
しないはず															1					
しなかったと																				
しなかったと													1							
しなかったと																				
しなかったろうに																				
しなければよい																				
せず																				
せずと											1									
せずと																				
せぬ									1	2	1		2	1	1	2	1		2	1
せぬと																				
せぬと												1								
せぬと	1		2																	
せぬとは																				
せぬぞ																				
せぬて																				
しまい			1											1		1				
しまいと															1					
しまいと									1		1		1	1		1				2
しまいか														1						
しまいに										1			1				1	1	1	
しまいよ											1									
しろ			1																	
しろと																				
すべし								1	1	1										
すべしさ																				
すべきか																				
しやがれ																				
しよ				1																
いたせ								1												
合計	46	13	24	12	6	22	52	82	98	86	80	77	110	82	128	135	136	141	112	102

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
																		1
																		3
					1													1
																		3
												1						1
1	1				2	2	4	1										22
1	2																	8
																		1
			1					1						1			1	14
	1																	2
1																		1
																		2
																		1
																		1
							1											1
				1														1
	1																	1
								1		1								2
			2		2	2	1					1		1		1	1	11
																		1
														1				1
1	2	1	3	3	3		2		2	2	3	1	1	1	1			40
					1													1
	2	1		1	5	1		2	2	1	1	2		4		1	5	32
									1									1
				1														1
						1												1
1		1		1	2		4	4	3	2	1	1						23
	1																	2
		1			1	1			1		1			1	3	1	1	18
																		1
																		5
																		1
							1											1
																		3
1																		1
				1		1												2
				1														1
																		1
																		1
92	90	99	93	125	168	109	115	81	108	105	99	99	72	83	86	84	104	3356

図表3-3

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
であります	34	20	7	6	16	14	29	18	8	17	13	26	17	29	20	12	21	35	38	45
でありますと							1	6	4		3	6	4	8	6	1	1	1	2	4
でもありますと														1						
でありますという	1																			
でありますよ							1				1									
でありますかさ										1										
でありますねえ								1												
でありますもの							1													
ではありますまい								1							1	1			1	
でもありますまい										2										
ではありません		2						3						2	2					1
ではありませんか	4	12	10	14	16	17	13	20	16	14	12	4	6	7	6	1			2	
ではありませんのさ														1						
でありませんと																				
でありませんかさ								1												
でありました	3	1		5	6	5	15	45	48	35	37	18	24	29	28	20	21	29	25	43
でありましたイヤハヤ									1											
でありましたと						1		1	1		4	1	3	1		3	1	2		
でありましたという	1	1																		
でもありましたか						1					1									
でありましたろう							1	1	3				1	1	3	1				
でもありましたろう								2					1							
でありましょう	1	3	3	11	12	13	14	18	12	12	11	9	15	14	3	5	4	12	4	7
でもありましょう			1								1									
でありましょうか						1	1							1						
でもありましょうか		1						1		1	2									
でありましょうと											1									
でありましょうに							1													
でありましょうよ											1							1		
でありましょうがな												1								
合計	44	40	21	36	50	52	78	117	93	82	87	65	71	94	69	44	48	80	72	100

図表3-4

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
でござります			11	36	35	24	22	21	25	17	5	2	3	1	3	2				
でござりますぞ																				
でござりますと									1											
でござりますよ				1																
でござりました			2	3		5		1	1											
でござりましょう			8	6	5						1		1							
ではござりませんか			2	1																
ではござりませんよ					1															
でござる																				
でござろう															1					
でござい									1											
合計	0	0	23	47	41	29	22	22	28	17	6	2	4	1	4	2	0	0	0	0

図表3-5

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
です					1															2
ですか														1						
ですぞ																				
でした					1															
でしょう																		1		
でしょうよ																				
合計	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
38	32	33	27	30	32	30	23	18	32	32	23	12	20	16	11	17	15	866
2	8		6	4	2		4	1	2		2		1	1			1	81
																		1
																		1
																		2
																		1
																		1
																		1
																		4
																		2
							1							2				13
1											1							176
											1							1
																		1
27	23	22	8	18	24	15	10	9	9	10	21	4	8	3	11	6	5	670
																		1
1			3	2	2		2								1			29
																		2
																		2
																		11
																		3
4	7		2	7	10	2	3	4	3	3	2	2	5	6	2	1	2	248
				1														3
																		3
																		5
																		1
																		1
																		2
																		1
73	70	55	46	62	70	47	43	32	46	47	48	18	34	28	25	24	23	2134

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
																		207
						1												1
																		1
																		1
																		12
																		21
																		3
																		1
			1															1
				1														2
																		1
0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	251

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
1		1										2	1					8
																		1
					1													1
														1			1	3
																		1
										1								1
1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	1	0	0	1	15

図表3-6

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
だ		4	7	11	2	3	2	6	4	3	4	5	4	4	4	5	7	19	15	9
だと						2		2	1					1	4	2	1	1		3
だとか															1					
だとさ								1		1										
だという		1	1	1	1	2	9	12	16	11	8	11	2	2		3	4	12	12	5
だとかいう									1						1	1				
だともいう								2												
だか					1	2	2	4	2	6	2	2	2	2	1	1		2	1	
だかさ					1															
だぞ																				
だねえ									1											
だよ								1	1	1	1									
だのに				1																
だろう			1			1	2			1		1						1		
だろうか														1						
だろうに							1													
ではない																	1		1	
ではねえ																				
でもない														1						
ではないか							3							1						
でもないか																				
ではないぞ					1															
ではないと														1						
でもないと																1				
ではないという										1										
ではなからう														1						
なのか												1								
じゃ																				1
合計	0	5	10	12	6	10	19	28	26	24	15	20	8	14	11	13	13	35	30	17

図表3-7

	明治8年				明治9年				明治10年				明治11年				明治12年			
	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月
である														1						
であると													1	4	3	3	2	1	1	
であるとか															1		1			
であるという	4	7	4	1		2	6	2	4		1	1	7	9	7	15	3	3	12	6
であるとかいう														2		1				
でもあるか																				
ではあるまい														1						
ではあるまいか																				
ではあるまいという																				1
であった															1	1				
であったと								1		1			2	3		1		1		
であったという		1					3	5	3		1	2	4				4	1	2	4
であったか											1				1					
であったのだと																1				
であったよ									1											
であろう					2							1		2	2	2		1		
であろうか										1		1		1						
でもであろうか																1				
であろうという	3		1		1	3	2			1	3	2	4	1		4	2	4		
であろうともいう													1							
でもであろうという									1											
でもであろうと申しました				1																
であろうと											1				2	1			1	
であろうに												1	1		1					
合計	7	8	6	1	3	5	11	8	9	3	7	8	18	23	21	29	13	10	17	11

北澤・許：明治前期読売新聞の文体の推移

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
10	15	9	13	16	27	24	28	22	12	8	13	7	4	2	3	1	1	333
	1			1	1													20
2						1		1										5
																		2
10	7	3	9	13	10	5	12	4	3	3	4	7		1	3		1	208
																		3
																		2
	1		1	1	1		2	1	2					1		1		41
																		1
						1			1		1							3
																		1
																		4
																		1
1				1	2	1												12
																		1
																		1
			1		2													5
			1															1
							1											2
				2	1												1	8
			1															1
																		1
																		1
											1							2
																		1
																		1
																		1
23	24	12	26	34	44	32	43	28	18	12	18	14	4	4	6	2	3	663

明治13年				明治14年				明治15年				明治16年				明治17年		合計
1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	
																		1
			1				1	1										18
								1					1	1				5
4	1	8	4	6	9	5	3	2	4	5	11	8	7	8	11	9	9	208
												2						5
										1		1						2
				1	1													3
							1								2			3
								1										1
									1									3
	1				4													14
2		3	1	1	4	2	3				4	2	2	1	2	3	2	62
							1											3
																		1
																		1
	1		1	3	3	1	2	2										23
																		3
																		1
1	3	3	2	3	1	1	1		4		3	2	3	2	2	3	3	68
																		1
																		1
		2					2											9
																		3
7	8	14	9	14	22	9	14	7	8	6	18	15	13	12	17	15	14	440

図表1 明治8年1月～明治17年4月の記事末形式の使用率の推移

